5 images from : Sounds of the Sea, Crickets and Translucent Yellow

Artist Statement

私は作品の素材になる音やイメージを探して様々な場所を訪れ、五感を通じて「ふたつの異なる場所に同時に存在する」という可能性を創作活動を出発点にしています。感覚と密接に繋がる記憶は、一つの場所にいながら、別の風景を反響させ、呼び覚ますことがあります。その観点から、私たちが「想像」するとき、風景がどのように作用し、曖昧で視覚化しにくい自然現象を、私たちがどのように捉えているかを模索しています。

Yellowhammer Infrasound

(キアオジの超低周波・2016 年)

この作品では、アイスランドの小さな森で調査した超低周波音を記録しています。超低周波とは人の耳には感知できない低音の周波音で、この周波を観測することで地殻の動きや火山活動などを観察します。

2016 年春、私はこの特定の低周波音を求めてまだ雪に覆われたこの森を訪れましたが、そこで私たちが聞いたのは鳥の鳴き声だけでした。見ることのできない自然現象である超低周波音を、何らかのかたちに記録する試みです。

Sounds of the Sea, Crickets and Translucent Yellow

(海、コオロギそして半透明の黄色の音・2016 年)

この作品では、日本とオランダのふたつの土地にあるという全く同じ像を探しに旅にでました。その彫刻のひとつは名古屋にほど近い地域にある公園に、もうひとつはオランダの海に面した小さな町にあります。この作品では、ふたつの場所の音をひとつに混ぜ合わせる体験を試みました。

撮影に行った時、私はこの作品の「聞き手」が理解出来る言語がわかりませんでした。撮影は沈黙の中で行われ、会話が認識できずに流れていく環境では、他の音の存在感が際立ちました。

アナンダ・サーン Ananda Semé

オランダ生まれ。ヨーロッパの川や運河に浮かぶ船の上で育ち、現在はノルウェーとオランダを行き来しながら、テキスト、映像、そして写真を媒体に作品制作をしている。アントワープのセントルーカス学校を卒業し、ベインハルト文化奨学生としてレイキャビックのアイスランドアカデミーで芸術学の修士号を取得。主な展示にコーパヴォグル美術館、ノルウェー若手現代美術展など。また、オランダをベースにした複数のオンラインマガジンで執筆活動を行う。

覚書　高瀬川の木霊

私は「サウンディング」という行為を知った。
井戸の深さを確かめるように　ー　君は井戸に小石を投げ入れ、そしてじっと耳を澄ますのだ。
『ブレーンウォーター』アン・カーソン

夕方５時、山への道を進むなか陽が落ちていく
森のなかで聞こえる音、怖いようなわくわくするような。
薄暗い森の聞きなれない音、ゴーストストーリーのはじまりみたい。

科学で「サウンディング」とは、湖や海底で音波を使って行われる水深測量のことをいう
人間にとって、いまだ大部分が未知の領域である海底の地図は、サウンディングのデータで作られる
メリアム＝ウェブスター辞書によると、「サウンディング」は他にも「探査」「テスト」「世論調査」などの意味があるらしい
まるでコウモリが超音波を発して、その反響音で周囲の環境を知るかのように。

高瀬川沿いにある３つの堰を訪れたとき、ダムの静寂さ、山の緑、湖のターコイズ色に言葉を失った。
日本で「コダマ」とか「ヤマビコ」と呼ばれる現象のこと、この場所で叫ばれる名前の植物たちのことを想った。

Echo : landscape – language – sound　　エコー：風景 - 言語 - 音

大町に滞在中、高瀬川周辺、特にダムに近い場所の草木を調べて回った
ダムの建設中、いくつかの木は死んでしまい、また建設後に再緑化として新たに植えられた木もあった。
ダム建設で破壊された土地にどこからかやってきて、根を下ろした最初の植物の名前も知ることになった
ハリギリ、ニセアカシア、オオカメノキ。

「オオカメノキ」という言葉の反響は高瀬川の谷間でどんな響きに聞こえるのだろう
どうやったら「エコー」や「コダマ」といった自然現象を視覚化できるだろうか
そんなことを考え始めたのが、「高瀬川の木霊」プロジェクトに繋がっている。

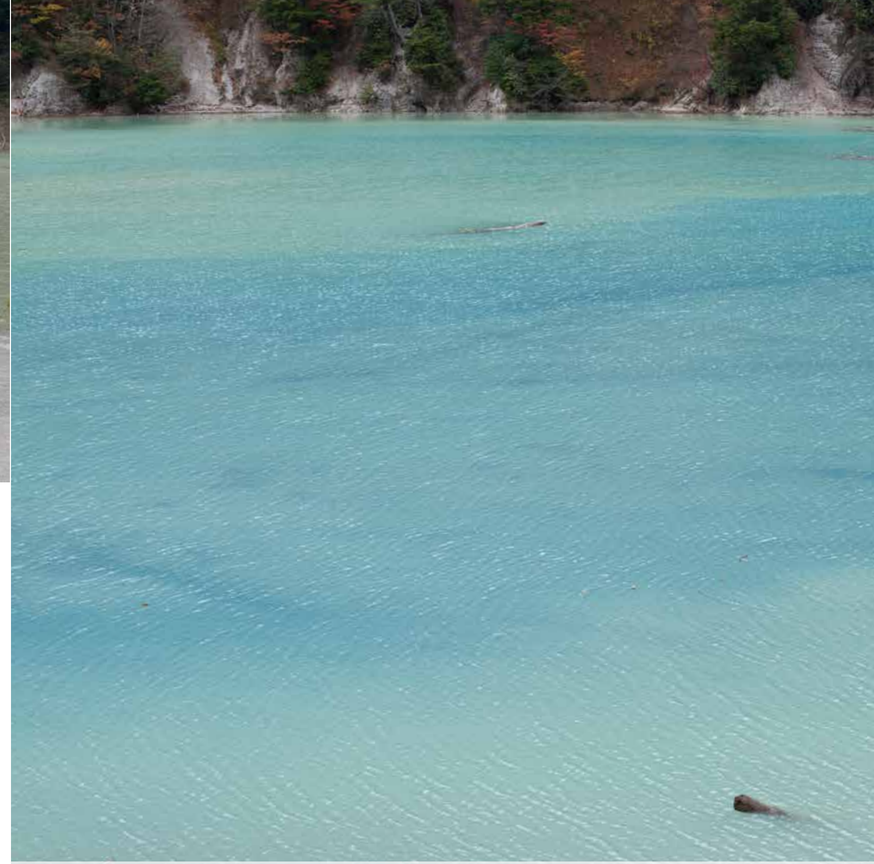
アナンダ・サーン：高瀬川の木霊
展示場所：大町リノプロ２F

信濃大町あさひアーティスト・イン・レジデンス滞在制作展

稲穂の実る音 SOUNDS THAT GROW THE RICE

２０１６年１１月１１日［金］－ １１月２０日［日］
大町市街地三カ所　＋　鷹狩山山頂古民家

信濃大町 AIR 事業推進協議会 事務局
〒398-8601　長野県大町市大町 3887
(大町市役所　総務部まちづくり交流課内)
E-mail: asahi-air@shinano-omachi.jp
TEL: 0261-22-0420　/　FAX: 0261-23-4304
発行：信濃大町アーティストインレジデンス事業推進協議会
助成：アーティスト・イン・レジデンス in 信州 モデル事業



アナンダ・サーン
Ananda Serné
高瀬川の木霊
Echoists of theTakase River

信濃大町
あさひAIR
http://shinano-omachi.jp/asahi-air

アナンダ・サーン

Ananda Serne / オランダ

Interview

■信濃大町での滞在制作はいかがですか?
あさひ AIR の公募を見たときに「水」というテーマに興味を持ちました。それで大町の風景写真を何枚か見て、ぜひ行ってみたいと思いました。正直に言うと、私は素晴らしい風景で多くの観光客に愛されている様な場所がそんなに好きではないんです。変な話ですが、工場地帯の茂みが注目されてなくて、可哀そうに思えてしまうというか。でも前回、日本の都市を一人で歩いていて、信号が青になった時の音楽に驚いて、魂に来る音だなぁと思いました。日本のそういうテクノロジカルなイメージを更新するように、今回の大町を体験しています。実は、大町って私が今住んでいるノルウェーにすごく似てるんです。ダムも沢山あるし、大町は日本のノルウェーというイメージで、それは少しシュールなんです。

■アナンダさんはどんな子供だったんですか?
私は船の上で育ちました。小学校の寄宿舎に入るまで、周りに同年代の子供がいなかったので、「空想の世界」でひとり遊びをすることが多かったです。小学校に入ってすぐの週末に、家に帰って「お母さん、私に本当の友達ができたの!」と喜んでいたそうなので、友達ができたことはとてもうれしかったのですが、幼少期に周りの誰にも邪魔されずに一人で自由な空想ができたのは、とても豊かな事だったと思います。空想上の友達がいたわけではないですが、風景や物から色々な物語を空想して楽しんでました。
私たちの家だった船が停泊できる場所が、都市では周辺の工場地帯だったり、スイスアルプスの自然の中だったり、という対照的な 2 つの場所を行き来していたのも、私の空想の世界を盛り上げてくれていたように思います。

■アートに興味をもったのはなぜですか?
子供の頃の夢は、生物学者か作家になって、世界中を旅することでした。空想の世界が続いている感じで、イメージが頭の中に浮かんだ時に、それを現実の世界でどう表現できるのか、という方法を模索することが、私にとってのアートへ向かう理由なのだと思います。
そもそも、私は一つの場所に縛られず、ボートで生活するように旅を続けていたかったんです。そういう風に仕事ができる方法として、生物学者と同様に、アートはひとつの選択肢でした。絵を描くのが得意じゃなかったので、文章や写真、映像を使って、表現するということをしています。ある特定の場所で自分が感じた現象世界の音や匂い、物、風景を吸収して、私の中の知識や物語と混ざって何かが生まれる。私には明確な興味があって、ある場所で印象的だと感じる「新しい瞬間」が大切なエッセンスになって、それをどうやって視覚化できるのか、というテーマで作品を制作しています。それはある種、なにかを追いかけているような感覚で、私が過去に制作した作品の先に、今の作品があるように感じています。

■アナンダさんの興味はどこにあるのでしょうか?
将来、みんながどのように「風景」を体験しているのかを調べたいと思っているんです。目の見えない人が、森の中を歩くのが好きだというのを本で読んだことがあるんですが、その体験を教えてほしい。きっと私が想像できないような世界を感じていると思うんです。そうやって、人それぞれが、それぞれの知覚で、それぞれ違った経験をひとつの場所からしていること、私たち人間がどのように「風景を五感で経験している」のかということを深めていきたいと思っています。そういう意味で、私は日本の風景がどのように経験されているのか、という事に興味を持っています。
今回の作品「高瀬川の木霊」では「エコー（反響・木霊）」をテーマにしていますが、これも今までずっと興味をもっているテーマなんです。例えば、私が育った船は海でどこにいるのか周辺の状況を計測するためにエコーロケーション(反響定位:自分から発した音が何かにぶつかって返ってきたもの（反響）を受信し、その方向と遅れによってぶつかってきたものの位置を知ること）という方法を使います。そういう経験が私の頭の後ろの方にあって、日本で高瀬渓谷に行って「やまびこ」や「木霊」という言葉に出会った時に、今回の作品の形が見えてくるんです。

■目の前の現象と経験が作品として混ざり合う。
私の作品は感情的ではありませんが、すごく気分に左右されています。最近、芸術大学の授業でも「調査」という言葉をよく使うんです。科学的な証明を主題に制作活動をしている人たちも多くいますし、美術館へ行くことがリソース（資源）調査と呼ばれたりする。それらはすごく感情と離れた主題への向き合い方で、それはそれで面白いと思うのですが、少し危険なのかもしれないと思っています。直観を深めていけるのがアートの良さだと思うので、すべてが説明可能だという錯覚によって、魔法としか思えないような瞬間を忘れてしまっているような気がするんです。

■大町の皆さんに一言お願いします。
ずっと同じ場所にいても、やっぱり私は新しい事で驚きたいといつも思っています。それは何か大きな出来事ではなくて、小さな音や、微かな匂い、そういう事から感じるのだと思います。そういう経験をさせて戴いて、本当に感謝しています。皆さんそれぞれが好きなように、私の作品を感じてください。